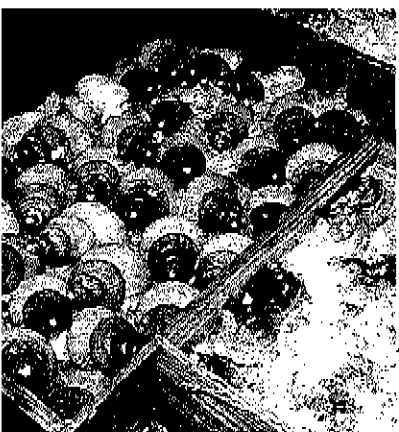


# 全国トップの水揚げ高



良米丸が水揚げしたバイ貝

# 「萩の梅貝」をブランド化へ

バイ貝が、全国トップクラスの水揚げを誇る越ヶ浜の水産会社「第五良米丸」（伊澤英孝社長）では、萩産バイ貝の魚価アップを、「萩の梅貝」の名前でブランド化に取り組んでいる。今年度、水産庁の関連団体「魚価安定基金」の「産地販売活性化事業」を活用。まだまだ知名度の少ない県内へのPR活動や都市部のスーパー、レストランへの販売など流通ルートも開拓していく。

## 越ヶ浜の水産会社 「第五良米丸」が販路拡大も

山口県では第五良米丸を含む萩市の三隻のみが許可を受けている。第五良米丸以外は越ヶ浜と大井にそれぞれ一隻ずつある。全国的に操業数も少なく生産量は、山口県が全国トップだという。県内は萩でしか操業して

# はぎ時事

発行所  
山口県萩市御許町 75-1  
はぎ時事新聞  
TEL.0838-25-8777  
FAX.0838-25-8770  
www.hagijiji.com  
購読料 月 1,200 円  
※購読申し込みは、本紙まで

総合印刷企画デザイン制作  
**マシヤマ印刷**  
萩市大字橋3732番地の7  
電話 0838 (2) 11108



の取り組みでバイ貝の魚価がアップし、バイ貝の漁業者全体の収益向上を目指している。

事業費は約四百万円。伊澤社長によると、第五良米丸の水揚げ量は全国トップレベルで推移。平成二十一年度には約二百五十トをマークした。以前は魚価も安定し、萩の他のバイ貝漁船二隻と同様、萩漁港に水揚げしてきた。しかし、全国的な不景気、魚価の低迷を受け、萩市場のバイ貝相場も下落。一億円を超えていた同社の年間水揚げが六千万円近くまで下がって

た。このような中、昨年二月、伊澤船長の長男で現社長の英孝氏（29）が東京から帰郷。ネット関連会社「ライブドア」やソフトウエア会社、東京電力などで実績を積んできた経験を生かし、バイ貝の販売方法を模索。全国的な相場なども研究した。バイ貝の消費地、金沢などでは秋市場より最低でも二〜三割高い値で取り引きされている。すぐさま金沢の市場なども調整。五月から出荷を本格化。現在では、同社で水揚げされるバイ貝のほとんどが金沢など県外に出荷されるまでに

## どうなる？ 参院選の行方

出馬予定の自民現職 長妻 共産の新人 **24日公示で本番へ**

十二日投開票の参院選（山口選挙区）に向け、萩阿武地区でも、自民党の現職、岸信夫氏（51）と民主党の新人、原田大二郎氏（66）の両陣営の攻防



イ貝は深海に生息する貝類。ユリツと食感と独特の香り、甘みが特色。みやサエより美しいとの評価もあ

イ貝漁は資源確保のため各県による許可制

イ貝漁は資源確保のため各県による許可制

## 沢なと県外に出荷で

取引値の増を目指す  
賛否で秋市場に刺激

五良米丸が、地元に出荷せずに金と他市場に送る取

秋市場関係者に大きな刺激となっていることとは確かだ。

「はぎ魚市場仲買」は、井関組合長が漁協はぎ統括支店正人運営委員長から「他市場へ出始める際、関係の協議が十分でない」など批判的な上になっている。そこで、「流通ルートは漁業者にとつて、必要に応じて」対する意見がある

る。しかし、地元秋や県内でもイ貝の知名度は低いのが現状だ。地元や県内でのPRは、もちろん都都市部への流通ルート拡大を目指すして導入したのが「産地販売活動活性化事業」。「秋の梅貝」のブランド名を前面に打ち出し、ポスターやチラシ

でも作成しPR。第五良米丸が越ヶ浜で経営するレストラン「秋池々茶屋」でも様々な種類のイ貝料理を提供しイ貝の魅力アピールしている。伊澤社長自ら東京のレストランやスーパーなどへも営業。流通ルートも開拓している。これら

価の高い下関や北九州の市場に出荷。今では八割近くを秋市場以外に出荷している。青木委員長は「合併したメリットを考へても魚価が高くなるようにしなければいけない。漁業者のため流通、市場改革を進めるべき」との認識を示している。

魚価低迷が続く中で、他市場に水揚げする傾向が強まる可能性が指摘されている。第五良米丸の取り組みはその一つ。県漁協はぎ統括支店の塩谷運営委員長は「新しい流通ルートを開拓するなど若い人たちの取り組みは理解できる。そのためにも漁協の方針、ルールに沿って協議

山口はぎ魚市場仲買組合の井関組合長は「漁業者がいてはじめて私たちの商売も成り立つ。漁業者、仲買のために仕組み作りは必要」とし「漁協合併時に掲げた、二元集荷の理念から考えると、他港水揚げの量が極端に増えるのは問題がある」と指摘している。



生かし、平成十六年の改選で初戦を飾って以降、県内各地をくまなく回り、秋阿武地区でも知名度が浸透してきた。選挙戦序盤では街頭演説など表立った

の「秋阿武選挙対策部」(本部長・田中謙)も設置。組織的動きも勢いを増してきた。

一方、原田氏は五月中旬の出馬表明以

## 水津組合長を再選

役員改選 両常務とも続投へ

「JAあぶらんど秋」の役員改選が、十九日、阿武町文化ホールであった同農協通常総代会で行われ、原案通り、新役員案を承認した。同日、一回目の役員会が開かれ、常勤役員を互選。この結果、小川地区選出の理事で現組合長の水津俊男氏を再選した。秋地区の理事で金剛担当常務の西山三郎氏、福智地区の理事で常務担当常務の佐々木進氏も続投となった。役員任期は三年間。

水津組合長は平成十八年の合併時から二期、四年間、組合長を務め、県下最低水準の財務状況だった組合を立て直した。不良債権額は最大で六十七億円あったが昨年度末には三十八億円まで圧縮。決算も当初は赤字だったが、平成二十年度に続き昨年度も黒字決算

を實現した。これらの手腕が評価され、改選前から組合員間では、水津氏の続投で「ムードが強まっている」といわれている。

水津氏は、平成三年、四十歳のとき、阿北農協の組合長に就任。二期五年間務めた後、山口阿武農協に合併し、常務、専務に就任。平成十四年からは、同農協の組合長を二期五年間、務めた。平成十八年には、あぶらんど秋が発足し、初代組合長に就任した。これまでに二十年間、組合長や常勤理事を務めてきた。現在、JA山口中央会の副会長にも就任している。

水津組合長は「財務



状況もようやく改善してきた。これからは、域密着型の農協運営より強め、JAあぶらんど秋のファンを増やしていきたい。農協商品購入毎にポイントが付く「総合ポイント」の導入も検討中。秋阿武地区のほとんどの住民に(准)組合員にしてもらえたいにしていきたい。」と意気込みを語っている。

役員は次のとおり ※は新。